

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：34533

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25860386

研究課題名(和文)患者講師による学内教育プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文) Research of the development of university education program by the person with disease instructors

研究代表者

森 明子 (Mori, Akiko)

兵庫医療大学・リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：90461243

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：【目的】本研究では実際の患者を招聘し、患者講師による講義や実技体験を盛り込んだ学内教育の反復実施が学生に及ぼす教育的効果について検討した。【対象と方法】患者講師による招聘授業を受講した学生を対象にアンケート調査を実施し、2年次後期、3年次前期より得られた結果を比較検討した。【結果】臨床力獲得に関する項目において、「必要な技術の修得ができた」と回答した学生が特徴的に増加していた。【考察】患者講師による招聘授業の反復実施を行ったことにより、疾患を越えた基本的な理学療法の修得に繋がりと、臨床場面を想定したより実践的な理学療法教育が展開できていると考えられる。

研究成果の概要(英文)：【Purpose】 In this research, we invited actual patients and examined the educational effects of repeated implementation of in-campus education including lectures by the person with disease instructors and practical experiences for the students. 【Subjects and Methods】 A questionnaire survey was conducted for students who took the invitation classes by the person with disease instructors, and the results obtained from the second and third years were compared and examined. 【Results】 In the item on clinical capability acquisition, the number of students who responded that "we were able to acquire the necessary skills" increased significantly. 【Discussion】 To have patient instructors carry the invitation classes repeatedly may stimulate the students to acquire basic knowledge and skills of physical therapy, and it may contribute to develop more practical physiotherapy education on the assumption of clinical situations.

研究分野：理学療法学

キーワード：患者講師 理学療法教育 教育方法 教育効果

1. 研究開始当初の背景

医療職の職能教育課程における教育現場では、臨床場面を想定した様々な教育方法が導入されている。しかし、学生にとって実際の患者イメージは掴みづらく、臨床場面で経験する緊張感や現実感を体験することは困難である。学生が主体的に参加し、問題解決のための活発な討論などを通じて学習を進行させる問題解決型学習(Problem-Based Learning:PBL)は、1970年代にMcMaster大学にて初めて医学教育へ応用された¹⁾。これは学生にとって受動的な教員による講義形式型学習(Lecture-based Learning:LBL)に対比される学習法として発展してきた。また、患者役について一定の訓練を受けた模擬患者(Simulated Patient:SP)を活用する医学教育については1964年、Barrowsにより報告された。さらに症状シミュレーションや、臨床診察能力トレーニング、コミュニケーショントレーニング、総合的臨床能力の評価を目的に、客観的評価の手法である客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination:OSCE)が1980年代に開発された²⁾。一方、日本国内では1975年のBarrows氏来日講演を皮切りに模擬患者の導入が進んできたが、医学教育において臨床能力やコミュニケーション能力などの教育が伝統的に高く評価されてこなかった等の理由により発展しなかった。しかし、近年は模擬患者を活用した教育方法も積極的に行われ、医学教育だけではなく薬剤師や看護師、理学療法士の養成教育においても実践、報告されている^{3)~7)}。

このように、臨床場面を想定した様々な教育方法を導入した実践が散見されるが、学生にとって実際の患者イメージは掴みづらく、実際の患者を目の前にした

時に感じる臨床現場での緊張感や現実感などを体験することは困難である。また、将来、臨床現場で患者に対し治療的な関わりを持つことになる学生の学習意欲を維持・向上させる教育方法の開発が重要視されていることから、新たな教育方法の展開が必要であると考えられる。「患者イメージ」や「臨床現場での緊張感や現実感」などを学内教育で伝えることができる教育方法の一助として、社会復帰を果たしている実際の患者を患者講師として学内教育へ取り入れる新しい教育方法を試みてきた⁸⁾。

2. 研究の目的

患者講師による講義や実技体験を盛り込んだ学内教育の反復実施が学生に及ぼす教育的効果について明らかにし、新たな教育プログラムとしての可能性について示唆することである。

3. 研究の方法

(1)対象

本研究は平成25年度2年次後期~平成27年度3年次前期に神経系理学療法学・もしくは神経系理学療法学実習2コマ(1コマ=90分)を受講した兵庫医療大学リハビリテーション学部理学療学科の学生に対するアンケートを対象とした縦断的研究である。招聘授業の反復実施の効果を評価するアンケート調査に参加した学生は、それまでの臨床実習はほぼ見学のみで、臨床実習経験が乏しい168名であった。

(2)実施方法

患者講師による招聘授業の2週間前には、映像を盛り込んだ頸髄損傷(2年次後期)脳卒中(3年次前期)に関する講義を行い、当日実施する理学療法評価項目を提示した。当日は、医療を受ける立

場からそれまでの体験を通じて感じたことなどを講義形式で話して頂き、その後、理学療法評価の実技を実施した。講義終了後、学生に対するアンケート調査を実施した。アンケートは研究代表者が先行研究で報告した内容分析より抽出されたコード⁸⁾をもとに、患者講師による講義に関する19項目のアンケート(無記名式)を作成し使用した。アンケートは「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4段階評価で実施し、2年次後期、3年次前期より得られた結果を検討した。なお、各カテゴリー別の質問項目を以下に示す。

<患者との関係性>

患者の生活イメージがわきやすくなった

患者との信頼関係の重要性が理解できた

患者と接する際の緊張感を感じた
医療に対する意欲が刺激された
将来役立つと思う

<実践場面の意識>

健常者と患者の違いについて捉えられた

臨床症状についての理解ができた
評価の意義について理解できた
臨床的知識の習得の重要性が理解できた

必要な技術習得の重要性が理解できた

<臨床力獲得>

臨床的な知識が身についた
必要な技術が身についた
授業の学習効果は高かった
自分自身が成長したと感じた
自分自身の学習充実度は高かった
このタイプの授業をまた受けたいと思う

<学習態度に対する内省>

実技練習時間が増えた
自宅学習の時間が増えた
授業の予習をしたと思う

(3)解析

統計学的処理には患者講師による招聘授業の反復実施による教育的効果をアンケート結果より検討するため、IBM SPSS Ver.24 を使用し Wilcoxon の符号付順位和検定を用いた。有意水準は5%とした。

(4)倫理性

患者講師には本研究の趣旨と目的等について文書と口頭による説明を行い、十分な理解を得た上で文書による同意を得た。また、学生に対しては、招聘授業を行うことならびに授業後のアンケートについて説明し、アンケート調査は自由意思によって行い、同意のない者は回答しないこととするよう説明を行った。しかしながらバイアスを防ぐため、教育的効果を検証するためのアンケートである等、研究の趣旨について一部を伏せて実施した。なお、本研究は兵庫医療大学倫理審査委員会(第13004号)の承認を得て実施した。

4.研究成果

アンケート回答に欠損はなく、すべての研究対象者168名(2年次後期:平成25年度45名、平成26年度42名、3年次前期:平成26年度41名、平成27年度40名)から有効回答が得られた。患者講師による招聘授業の反復実施における教育的効果については、2年次後期と比べて3年次前期において有意にポジティブな意見が増加していた($P<0.05$)。アンケート調査結果を表1に示す。

表1 アンケート調査結果

カテゴリ	質問項目全文	2年次後期(87人)		3年次後期(81人)	
		そう思う ややそう思う	あまり そう思わない そう思わない	そう思う ややそう思う	あまり そう思わない そう思わない
患者との関係性	患者の生活イメージがわかりやすくなった	86 (98.8)	1 (1.2)	81 (100)	0
	患者との信頼関係の重要性が理解できた	86 (98.8)	1 (1.2)	81 (100)	0
	患者と接する際の緊張感を感じた	87 (100)	0	80 (98.8)	1 (1.2)
	医療に対する意欲が刺激された	87 (100)	0	81 (100)	0
	将来役立つと思う	87 (100)	0	81 (100)	0
実践場面の意識	健常者と患者の違いについて捉えられた	87 (100)	0	81 (100)	0
	臨床症状についての理解ができた	84 (96.5)	3 (3.5)	80 (98.8)	1 (1.2)
	評価の意義について理解できた	87 (100)	0	80 (98.8)	1 (1.2)
	臨床的知識の習得の重要性が理解できた	87 (100)	0	80 (98.8)	1 (1.2)
	必要な技術習得の重要性が理解できた	87 (100)	0	81 (100)	0
臨床力獲得	臨床的な知識が身についた	82 (94.3)	5 (5.7)	79 (97.5)	2 (2.5)
	必要な技術が身についた	62 (71.3)	25 (28.7)	74 (91.4)	7 (8.6)
	授業の学習効果は高かった	87 (100)	0	81 (100)	0
	自分自身が成長したと感じた	78 (89.7)	9 (10.3)	75 (92.6)	6 (7.4)
	自分自身の学習充実度は高かった	75 (86.2)	12 (13.8)	74 (91.4)	7 (8.6)
	このタイプの授業をまた受けたと思う	87 (100)	0	80 (98.8)	1 (1.2)
対字する態度内に反省に	実技練習時間が増えた	80 (92.0)	7 (8.0)	81 (100)	0
	自宅学習の時間が増えた	75 (86.2)	12 (13.8)	72 (88.9)	9 (11.1)
	授業の予習をしたと思う	78 (89.7)	9 (10.3)	77 (95.1)	4 (4.9)

上段：回答数 下段：回答率(%)

患者講師による招聘授業の反復実施において、患者との関係性や実践場面の意識に関するカテゴリの質問項目の結果は「そう思う」「ややそう思う」のポジティブな意見に集約される結果となった。

臨床力獲得に関するカテゴリにおいて、ポジティブな意見が特徴的に変化した結果となった項目は 必要な技術が身についた(2年次後期71.3% 3年次前期91.4%)であった。また、他の質問項目に関してもポジティブな意見が増加・維持されていた。

学習態度に対する内省に関するカテゴリにおいて、ポジティブな意見が特徴的に変化した結果となった項目は 実技練習時間が増えた(2年次後期92.0% 3年次前期100%) 授業の予習をしたと思う(2年次後期89.7% 3年次前期95.1%)であった。他の質問項目に関しても患者講師による招聘授業の反復実施において高い結果が得られた。

<引用文献>

1) Norman GR. Problem-solving skills, solving problems and problem based

learning. Med Educ 1988 ; 22 : 279-286.

2) Harden RM, Gleeson FA. Assessment of clinical competence using an objective structured clinical examination (OSCE). Med Educ 1979 ; 13 : 41-54.

3) 沖田一彦, 宮本省三, 板場英行, 他. 理学療法教育へのシミュレーションの導入

- 模擬患者を用いたインテーク面接の実習について - 理学療法学 1992;19(1):18-24.

4) 潮見泰藏. 理学療法士教育モデルの提案 教育目標 理学療法 2005;22(3):553-559.

5) 山本裕子, 池田由紀, 今戸美奈子, 他. 模擬糖尿病患者を利用した慢性看護学演習の効果と課題. 大阪府立大学看護学部紀要 2006 ; 12(1) : 1-10.

6) 佐藤仁. 模擬患者を導入した授業の試み. 理学療法科学 2008 ; 23(1) : 115-119.

7) 江川孝, 谷口律子, 柴田隆司, 他. PBL型コミュニケーション演習における模擬患者の積極的活用と演習内容の評価. 医療薬学 2009;35(12):875-883.

8) 森明子, 香川真二, 野崎園子. 患者講師による学内教育がもたらす教育的効果について. 臨床理学療法研究 2012;29:29-33.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 3 件)

AKIKO MORI, MASAMI HIDAKA: Invitation lecture and practice trial by person with history of disease instructors (Third report). World confederation for Physical Therapy Congress 2015、平成 27 年 5 月 2 日、Suntec Singapore Convention & Exhibition Centre (Singapore)

森明子、香川真二、日高正巳: 患者講師による招聘授業の試み - 第 2 報 - . 第 46 回日本医学教育学会大会、平成 26 年 7

月 18 日、和歌山県立医科大学紀三井寺キャンパス・高度医療人育成センター・講堂（和歌山県和歌山市）。

森明子、香川真二、日高正巳：患者講師による招聘授業の試み．第 7 回全国大学理学療法学会教育学会大会、平成 25 年 10 月 14 日、大宮ソニックシティ市民ホール（埼玉県さいたま市）。

6．研究組織

(1)研究代表者

森 明子（Mori, AKIKO）

兵庫医療大学・リハビリテーション学部・
准教授

研究者番号：90461243